

## ⑪馬込の文士村を訪ねる

2018. 10. 24 秋山

JR 大森駅～小銃射的場跡の碑～大森ホテル跡～望翠楼跡～山王会館 馬込文士村資料展～善慶寺～山本有三・片山廣子～右近坂～阿部別邸跡(都営住宅)～石坂洋次郎・川端康成～臼田坂～お地蔵さま～磨墨(するすみ)の碑～稲垣足穂・衣巻省三～宇野千代・尾崎士郎～太田区立博物館(解散:都営西馬込駅まで 10 分)

### 馬込文士村

大正後期から昭和初期にかけて、東京府荏原郡馬込村を中心に文士や芸術家が暮らしていた地域のことです。

馬込文士村の馬込村(現在の北・南馬込)と入新井村(現在の山王、中央)は、江戸時代までは農村でした。この農村に明治9年(1876)東海道線大森駅の開業により、馬込は東京近郊の別荘地として開発されるようになりました。それに伴い文化人の往来も見られるようになりました。明治の終わり頃になりますと芸術家や詩人たちが山王一帯に住むようになりました。

大正 12 年に後に文士村の中心的な存在となった尾崎士郎が馬込に引っ越してきました。尾崎士郎は馬込が気に入り、知り合いの文士たちに、しきりに馬込に引っ越してくるよう勧誘しました。大正 12 年の関東大地震により東京市内は大規模な被害を受け、家を失った人びとは、郊外に移ってきました。東京の近郊にあたる馬込など、周辺は農村から住宅地へと徐々に変貌していきました。

### 文士村のレリーフ



大森駅山王西口を出たら池上通りの横断歩道を渡り、天祖神社脇の石段を上ると、右側の壁に文士村住民 43 人のレリーフがあります。

文士村のレリーフ

### 日本帝国小銃射的場跡の碑

明治 22 年から昭和 12 年頃まで射撃場として使われていました。一般の人に小銃射撃の練習を奨励するために、明治5年(1882)西郷従道らが本郷向ヶ岡に設立しました。本郷から大森に移転したのが明治 22 年のこと。射程距離は 300m と 500m の二つがありました。現在駐車場の脇に「日本帝国小銃射的協会跡」の碑があります。



### 大森ホテル跡



現在は山王公園になっている所に大森ホテルがありました。大正 11 年(1922)に開業。純洋式建物で客室数は 33。バス、トイレ付き。応接間にはピアノが置かれていました。上下のベランダと構内の花園は、東京の郊外気分を味わうには十分であったといわれています。近くの望翠楼ホテルと客を奪い合っていました。

当時の大森ホテル

## くらやみ坂

昔、坂のそばに八景園があり坂の反対側に加納子爵邸があって、坂には八景園の樹木が鬱蒼と覆いがかり、昼間でも暗かったので、この名がついたといわれます。くらやみ坂の名称はポピュラーで、東京には主なものが12坂あるといわれています。大正11年に近くに大森ホテルが出来て経営不振になりました。

## 望翠楼ホテル跡(ぼうすいろう)

大正元年に開業した洋館二階建て。客室は20室。部屋はバス・トイレ付。当時の日本国内では、あまり例のない本格的なホテルでした。食堂は100人収容でき、庭園が広く樹木が茂っていました。近くに大森ホテルが出来て経営不振に落ちいりました。



## 大田区立 山王会館馬込文士村資料展示室



山王会館の入口、



マンションの1階、馬込文士村展示室の入口

大正から昭和初期にかけて、馬込や山王にゆかりのある尾崎士郎や宇野千代などの作家の原稿や作品が展示されています。中央に和室があり、ゆったりとした雰囲気です。鑑賞できます。入場無料です。

## 善慶寺

### 義民六人衆の墓

江戸時代の荏原郡新井宿村は、家康の関東入府から幕末に至るまで、旗本木原氏の知行地でした。4代兵三郎重弘の時代、延宝元年(1673)の旱魃、翌年の多摩川の氾濫による洪水や長雨のなどの天災で農民の困窮は激しく、過酷な年貢収奪に耐えかねた村民は、19条の訴状を提出して年貢の減免を願い出ました。この訴えは黙殺されたため、百姓6人は将軍家綱に越訴しようとしたが、決行直前の延宝5年(1677)正月二日、密告により捉えられ神田橋門外にあった木原内匠邸で処刑されています。



善慶寺

新井宿義民6人衆による越訴事件は、村人の中に語り受け継がれ、延宝7年義民の縁故先にあたる間宮藤八郎が両親の墓を建てると称して、6人の法名を刻んで密に設立したのがこの墓石です。正面に父母の、裏面に6人の法名が刻まれており、台石の四方に花立と水入れが取り付けられ、その間をくり抜いて連結し、一カ所に水を注げば四方に行き渡るよう工夫されています。

**越訴(えっそ)**一般農民・町人や下級武士が手続きを無視して、直接将軍や幕閣などに訴状を渡す行為

義民六人衆の墓



## 右近坂

この坂は江戸末期にできたといわれています。坂の由来はいろいろな説があります。臼田坂の右から谷中におりる坂道だから「右近坂」とよばれるようになった。近くに「右近」あるいは「おこん」と呼ばれる女性が住んでいた。また「うこん色」の着物を着た娘が、よくこの坂を通ったからと様々です。今は住宅街の中の坂道になっていますが、大正期から昭和初期にかけて辺鄙な人通りのない寂しい坂でした。坂の両側は椎の木などの林で、雨の日はどろんこ道になったそうです。



## 臼田坂

昔から馬込より大森に出るには、この臼田坂か暗闇坂が主な道でした。この通りを昔は田無街道と呼んでいました。馬込をぬけ三軒茶屋を経て田無へ通じる街道でした。

昭和4年に東京府制が施行されてからも、この道路は府道第56号大森田無線と呼ばれていました。臼田坂の地名については、坂のあたりに臼田姓の家が多かったので、この名がついたといわれています。また、坂の周辺には大正末期から昭和初期にかけて萩原朔太郎、川端康成、石坂洋次郎など多くの作家が住み、「馬込の文士村」という言葉が生まれました。この坂は馬込文化村のメインストリートでした。



## お地藏さま

臼田坂の坂上に「お地藏さま」があります。この地域は臼田家の先祖が故郷の甲州から生糸を運んできたといわれています。戦争に遭いお顔は剥落していますが、今でも地元民のお参りが絶えません。お地藏さまは戦前「金剛剣難よけ地藏尊」と呼ばれ、戦地に向かう若い人達の参詣祈願を集めました。

臼田坂のお地藏さま



**山本有三** 明治 20～昭和 47 年(1887～1974)小説家 劇作家 馬込時代は国会議員をつとめた。



山本有三は三鷹の家を進駐軍に接收されたため、昭和 21 年の暮れに新井宿に越してきました。翌年4月に参議院議員となり、任期の6年間に、国立国語研究所設置法、祝日に関する法律、文化材保護法等の成立に力を尽くしました。この家から湯河原へ転居したのは任期終了後の昭和 28 年 12 月です。

劇作家として出発した有三は、耳で聞いて分かる言葉を心掛け、表記の方法も口語体の漢字まじり文を提唱しました。振り仮名がなくとも誰でも読める文章のことです。また青少年の育成にも力を注ぎ、小中学校の国語の教科書の編集にも携わりました。当用漢字・現代仮名遣いの普及など幅広い活動をしました。**主な作品** 「女の一生」「真実一路」「生きとし生きるもの」

**片山廣子** 明治 11～昭和 32 年(1878～1957)大森の貴夫人 79 歳死去  
歌人、随筆家、アイルランド文学翻訳家。東洋英和女学院卒。佐々木信綱に師事して歌人として活躍しました。片山広子が大森にやってきたのは明治 43 年のことで、小林古径や川端龍子が参加していた「大森丘の会」にも加わっています。広子の住む大きな邸宅には村岡花子や佐多稲子など文学を志す人たちが訪れていましたが、その中には彼女に憧れを抱いていた芥川龍之介や室生犀星、堀辰雄らの姿もあったということです。

**主な作品** 「燈火節」「歌集」「野に住みて」



### 阿部別邸跡

備後福山 10 万石の藩主阿部正弘は、寺社奉行を経て老中になるのが、天保 14 年(1843)24 歳の時です。当時の日本は外国の度重なる接近に動揺し、その対応に苦慮していました。嘉永6年(1853)6 月にアメリカの使節ペリーが浦賀に来航しました。正弘は品川沖に御台場砲台を築き、対策を講じました。その阿部正弘の別邸があった場所です。



**石坂洋次郎** 明治 33～昭和 61 年(1900～1986) 小説家 86 歳で死去



石坂洋次郎の下宿は、臼田坂の登り口にあった瀟洒な九州閣というアパートでした。このころの洋次郎はまだ学生で、創作活動のほうは手をつけるのみで、完成品はありませんでした。大学卒業後によりやく「海をみに行く」を書き上げましたが、原稿を託した相手に忘れられ、仕方なく郷里に帰って教職につきます。

教職のかたわら執筆活動を続け、昭和 11 年「若い人」がベストセラーになり、これをきっかけに作家として上京し、田園調布にやってきたのは昭和 14 年でした。

**主な作品** 「若い人」「青い山脈」

**川端康成** 明治 32 年～昭和 42 年(1899～1972)小説家 文芸評論家  
臼田坂の途中に住む

友人の尾崎士郎の誘いで馬込に移り、この頃は文芸時報を執筆しています。無口で人付き合いの苦手な人でしたが、文士たちが多く住む臼田坂に住まいがあったため、尾崎士郎らの訪問をたびたび受けることとなります。「賭けに負けたので」と夫人がある日突然断髪すがたで帰宅したり、自らもあらぬ恋愛のうわさを立てられたり、村の騒ぎを高見で見物とはいかなかったそうです。



### 磨墨塚の碑(するすみのひ)

源平の宇治川の合戦で活躍した梶原景季の名馬「磨墨の墓」と言われています。磨墨の墓は日本各地にあります。磨墨の石碑は、昭和の初めに近隣に住んでいた篤志家が、磨墨塚の伝承を後世に伝えようと私財で建てたものです。



**衣巻省三**(きぬまきせいぞう)明治 33～昭和 53 年(1900～1978)詩人 小説家 78 歳死去  
裕福な家に育ち馬込在住の文士のなかでは、貧乏の味を知らない唯一の文士とされています。馬込に建てた自宅のアトリエでは、萩原朔太郎や宇野千代、川端康成夫人、室生犀星らが招かれて、ダンスパーティが開かれ、馬込のダンス流行の震源地であったということです。

**主な作品** 「けしかけられた男」「黄昏学校」

**稲垣足穂**(いながきたるほ)明治 33～昭和 52 年(1900～1977)

小説家、佐藤春夫に認められて文壇に登場し、婦人公論、中央公論等に作品を発表。新感覚派の作家として活躍しました。稲垣足穂と衣巻省三は神戸時代の同級生で、ともにモダンホーイの代表格といえる青年同士でした。大正 12 年 12 月大阪の新聞社で女学生を対象にした「代表的なモダンボーイ5名」の投票が行われ、この5名の中に稲垣の名がありました。その稲垣が衣巻家に転がり込んできたのは、衣巻家のアトリエでダンスパーティが開かれていたころのことでした。**主な作品** 「一千一秒物語」「星を売る店」

**宇野千代** 明治 30～平成8年(1897～1996)小説家 評論家 98 歳死去

大正、昭和、平成にかけて活躍した小説家、随筆家。多才で知られ、編集者、着物デザイナー、実業家の顔を持つ。作家の尾崎士郎、画家の東郷青児、北原武夫など多くの著名人との恋愛・結婚遍歴を持ち、その波乱に富んだ生涯は様々な作品の中に描かれています。

尾崎士郎と出会った宇野千代は、馬込の大根畑の中に家を一軒見つけます。農家の藁ぶき納屋を改装し、費用は百三十円でした。夢見る新進女流作家は、初めて稼いだ原稿料で家を建てたのです。部屋の中は、ばら模様の壁紙にレースのカーテン、金属製のベットと小さなオルガン、それに机を置いて、まるで椿姫が寝ているような部屋が出来上がります。これが何かというと家を建てたくなる彼女の癖の始まりでした。

**主な作品** 「脂粉の顔」「大人の絵本」「白露の戦間書」「大人の絵本」



**尾崎士郎** 明治 31～昭和 39 年(1898～1964)

小説家、新聞連載の人生劇場が大ヒットし、流行作家になりました。尾崎士郎は、知り合いの文士たちに馬込住まいをしきりに勧めていました。その甲斐あって馬込の尾崎・宇野家には、以前から馬込に住む文士と新たに移ってきた文士たちが、代わるがわるやってくるようになります。

士郎は人に愛されすぎるのが唯一の欠点のような男子で、何時しかガキ大将のような存在なり、士郎の家は訪問客があれば、たちまち議論となるのでした。文士村の出来事が士郎の書斎に伝わると、みるみる村中に伝わっていきました。そんな士郎の邸宅を「馬込放送局」と呼んでいました。

**主な作品** 「人生劇場」「石田三成」「相撲随筆」



鎧坂(あぶみさか) 南馬込にある坂の名前。鎌倉時代の武将梶原景季(かじわらかげすえ) 1162~1200 の愛馬磨墨(するすみ)の鎧が落ちたという伝説にちなみ、鎧坂という。鎧坂は臼田坂から南西の低い地一体を指します。



**真船豊** (まふねゆたか) 明治 32 年~昭和 52 年(1902~1977) 劇作家 小説家

北海道の牧場や新聞社に勤めたり、農民運動に参加したりした。貧しい暮らしのなか、出来るだけ安い家賃の家を探していたため、三畳二間の板壁の家であったといいます。大田区に住み、原稿料が月 15 円であったことからペンネームを「大森十五」としました。 **主な作品** 「太陽の子」

### 大田区立郷土博物館

昭和 54 年(1979)の開館。大森貝塚などの考古資料、海苔養殖資料、馬込文士村関係資料などを常設展示している。入館料は無料です。

#### この他の文士・芸術家たち

村岡花子、室生犀星、山本周五郎、吉屋信子、川瀬巴水、川端茅舎、北原白秋 小島政次郎、小林古径、神山潤、佐藤朝山、子母沢寛、城左門、添田さつき、高見順、竹村俊郎、日夏耿之介、広津和郎、廣津柳浪 藤浦光、真野紀太郎、牧野信一、間宮茂輔、三好達治 今井達夫 添田さつき、吉田甲子太郎(きねたろう)、牧野信一

#### 参考資料

馬込文士村ガイドブック	大田区立郷土博物館
馬込文士村	大田区立郷土博物館
馬込文士村散策の栞	大田区立郷土博物館